

2008.12.5

潮流



鳥取県中部医師会副会長
NPO法人未来副理事長

松田 隆

インフルエンザの予防接種に忙しい時期ですが、インフルエンザ菌b型（ヒブ＝Hib）ワクチンが今月十九日に発売されます。同じ「インフルエンザ」という名称で間違えやすいのですが、インフルエンザ菌というのは、冬に流行するインフルエンザ（流行性感冒＝流感）を引き起こすウイルスとは全く異なり、

一八九〇年に流行したインフルエンザの患者の痰から見つかった細菌のことです。

このヒブワクチンは小児の細菌性（化膿性）髄膜炎の予防を主目的として作られました。脳や脊髓を覆っている髄膜に細

抗生剤の効きにくい耐性菌が増え、約80%が耐性化し、髄膜炎の治療が難しくなってきた現在、乳幼児では、ワクチン

で、半数以上がゼロの一歳です。15～20%に後遺症が残り、5%が亡くなっています。

今は、自己負担はかなりあるものの、希望すればワクチンを接種できる状況となっていました。一方、一九八七年に認可され、一九九〇年には定期接種としてヒブワクチンを行っている米国では、五歳未満人口十万人あたり年間二十五人だったヒブ髄膜炎発症数が、その劇的な効果で、ワクチン導入後はほぼゼロになりました。

一方、鳥取県中部医師会では、昨シーズンの乳幼児のインフルエンザワクチンの公費補助のもと

Hib（ヒブ）ワクチン

菌が入りこんで炎症を起

こすのが細菌性髄膜炎

の方法と考えられます。

二年前、日本外来小児

細菌性髄膜炎の約60%は

ヒブが原因とされていま

す。

最近、このヒブによる

髄膜炎が増加し、全国で

年間約六百人が罹患し、

そのほとんどは五歳以下

を残した「細菌性髄膜炎

を守る

から子どもたちを守る

任意接種というと、予

めています。

防接種をしなくていいと

日本では任意接種のワ

クチンとして、個人負担

で、半数以上がゼロの一歳です。15～20%に後遺症が残り、5%が亡くなっています。

今は、自己負担はかなりあるものの、希望すればワクチンを接種できる状況となっていました。一方、一九八七年に認可され、一九九〇年には定期接種としてヒブワクチンを行っている米国では、五歳未満人口十万人あたり年間八十二億円との試算もあります。すでに、鹿児島市や宮崎市では公費補助を行うことが決まりました。

一方、鳥取県中部医師会では、昨シーズンの乳幼児のインフルエンザワクチンの公費補助のもと

以上で定期接種に組み込まれています。

日本では任意接種のワクチンとして、個人負担